

## 人名解説

### 2 土佐光信 ～大永2年(1522)頃

絵師。文明元年(1469)宮廷絵所預となり多くの画事に携わる。この間明応5年(1496)刑部大輔、文亀3年(1503)従四位下となり、画家として最高の地位に昇り、画派としての土佐派を確立する。大和絵の代表的な画家として、後世、古画の筆者を光信に仮託する例が多く現れた。

### 3・4 土佐光吉 天文8年(1539)～慶長18年(1613)

絵師。光茂の弟子と伝えられる。元名は玄(源)二であり、光茂の子の光元が戦死した際、紙形、文書、知行を譲られ、光元の遺児を養育したとされる。狩野派とも交渉をもち、大坂城、二条の館などの絵を描くが、終生堺を離れなかった。剃髪して久翌と号す。

### 4・5 土佐光則 天正11年(1583)～寛永15年(1638)

絵師。久翌の子、ないし弟子と伝えられる。通称源左衛門。久翌とともに堺にあったが、寛永11年子の光起を連れて京都に移住し、土佐家再興を企てた。源氏絵色紙のように細密な画法を特色とした。

### 6 土佐光起 元和3年(1617)～元禄4年(1691)

絵師。光則の子。堺に生まれ、のち京都に移住。承応3年(1654)に、永禄12年(1569)以来失われていた宮廷の絵所預となり内裏造営に参加し、土佐家を再興した。延宝9年(1681)剃髪して常昭と号し、貞享2年(1685)法眼に叙せられた。多くの遺作の外、著書に『本朝画法大伝』がある。

### 7～9 土佐光成 正保3年(1647)～宝永7年(1710)

絵師。光起の子。幼名を藤満丸。法名を常山という。宮廷絵所預となり、元禄9年(1696)従五位下刑部大輔に叙せられる。父光起の法をよく守り、内裏、仙洞御所の画事に多く携わった。

### 10 土佐光芳 元禄13年(1700)～明和9年(1772)

絵師。光祐の子。宝永4年(1707)、8歳にして春宮坊の杉戸絵を描き、翌年仙洞御所で御前揮毫を行うなど、幼いときからその才能を発揮、父の業を継いで禁裏の画事を承り、正五位下大蔵少輔に至る。元文3年(1738)大嘗会悠紀主基の屏風を描く。延享3年(1746)剃髪して常覚と号す。当時頗る盛名があった。

### 11 土佐光淳 享保19年(1734)～明和元年(1764)

絵師。光芳の長子。父の業を継いで宮廷絵所預となる。従五位下、内蔵大允に至る。寛延元年(1748)大嘗会悠紀主基屏風を描く。

### 12・13 土佐光貞 元文3年(1738)～文化3年(1806)

絵師。字は士享。光芳の二男。別に一家を開く。正五位下、左近衛将監、土佐守に任ぜられる。宝暦10年(1760)宮中の御障子を描き、明和元、8、天明7年(1764、71、87)等の大嘗会悠紀主基の屏風を描く。また寛政度内裏の諸殿に障屏を描き、当時頗る盛名があった。

### 14・15 土佐光孚 安永9年(1780)～嘉永5年(1852)

絵師。土佐家分家二代。光貞の子。実は御蘭玄蕃頭の三男。10歳の時寛政度内裏の清涼殿屏風を描く。以後禁裏の画事を承り、父に勝るといわれた。文化3年土佐守に任ぜられ、従四位上に至る。没後、正四位下を贈られる。

### 16 土佐光禄 寛政6年(1794)～嘉永2年(1849)

絵師。光時の子。宮廷絵所預を継ぎ、天保4年(1833)正五位、同6年三河守に任ぜられる。

### 140～143 土佐光武 天保15年(1844)～

絵師。光清の子。累進して従五位、土佐守に至る。明治維新後、京都府画学校の教授を勤める。

### 18～20 足利義晴 永正8年(1511)～天文19年(1550)

室町幕府12代将軍。義澄の子。大永元年(1521)細川高国に擁されて将軍となったが、実権なく、しばしば京都を追われる。天文15年(1546)将軍職を義輝に譲って引退、近江穴太で没する。法名万松院。

### 25～28 足利義輝 天文5年(1536)～永禄8年(1565)

室町幕府13代将軍。義晴の子。天文15年(1546)将軍となる。管領細川氏の内紛、三好・松永の勢力増大に押されて将軍は名ばかりのものであった。永禄8年、実権を取り戻そうと企てたが松永久秀らに責め殺された。法名光源院。

24 三好義継 ～天正元年(1573)

武将。十河一存の子、一存の兄長慶の養子。初名重存。長慶の死後、家督を継いだ家臣の松永久秀に実権を握られた。永禄8年(1565)久秀とともに將軍足利義輝を殺したが、久秀や三好三人衆と対立して、同11年織田信長に降った。しかし義昭の妹を妻とした為、義昭が信長に廃されると攻撃を受け、自刃する。

32～40 千 利休 大永2年(1522)～天正19年(1591)

利休流茶道の祖。和泉堺の生まれ。最初北向道陳に、ついで武野紹鷗に茶の湯を学び、大成する。また大徳寺の笑嶺宗訴に参禅して宗易の名を与えられた。織田信長、豊臣秀吉の茶堂とし仕え天下一の名人と称され、天正13年(1585)には正親町天皇に茶を献じ、利休という居士号を勅賜された。同15年、秀吉の催した北野の大茶会を主宰した。しかし同18年秀吉の怒りにふれ、翌年堺で自刃した。

41～44 千 宗旦 天正6年(1578)～万治元年(1658)

茶匠。少庵の長男、利休の孫。字は元伯、号は咄々斎など。少時大徳寺に入り、喝食となる。文禄3年(1594)千家の再興されたときに父少庵とともに不審庵に帰る。しかし祖父利休の末路をみて生涯仕官をしなかった。佗茶に徹し、特に茶禅一味を提唱、乞食宗旦の異名があった。

45 原叟宗左 延宝6年(1678)～享保15年(1730)

表千家流の茶匠。久田宗全の子。良休宗佐の義子。原叟、覚々斎、流芳と号す。紀州徳川家に仕え、宗旦以後の達人と言われた。

46 天然宗左 宝永2年(1705)～寛延4年(1751)

表千家流の茶匠。原叟宗左の二男。天然、如心軒、恕斎と号す。紀州徳川家に仕える。

47～48 志野宗信 室町中期

志野流香道の開祖。名は以実、松隠軒と号す。將軍足利義政に近侍し、その命により香の作法や規式を研究、大成する。文亀2年(1502)の牡丹花肖柏らと「名香合」を催したことは有名。また村田珠光らと交わり、茶の湯もたしなんだ。

48 蜂谷家

志野流香道の家元。志野流は四世蜂谷宗悟以後、蜂谷家が正統となる。

49 今井宗久 永正17年(1520)～文禄2年(1593)

堺の会合衆、政商、茶人。納屋を称し、剃髪して昨夢斎と称した。信長の堺制圧に協力して、近郷五ヶ荘の代官職に任ぜられる。また茶の湯を武野紹鷗に学び、その女婿となった。信長、秀吉の茶堂を勤め、天王寺屋宗及、千利休とともに天下三宗匠と称された。松島の茶壺、紹鷗茄子など多くの名物を所持した。天正15年(1587)の北野大茶湯を最後に引退したと思われる。

50・51 三好実休 大永6年(1526)～永禄5年(1562)

武人。長慶の弟。名は義賢、之康、物外軒と号した。豊前守に任ぜらる。管領細川氏に仕え、阿波三好城、勝瑞城主となる。天文13年(1544)兵2万を率いて上洛。同21年細川持隆を殺して河内の国を奪ったが、永禄5年、畠山高政と戦い、泉州久米田において敗死する。堺衆らと親交が深く、武野紹鷗に茶湯を学び、50種に及ぶ名物道具を所有していた。

52 武野宗瓦 天文19年(1550)～慶長19年(1614)

茶人。武野紹鷗の子。水宿庵、方寸斎と号す。早くより父を失い、今井宗久の後見を得て成長する。しかし所領を宗久と争い、信長の信を得ている宗久に敗れ、堺を追われる。この時伝来の名物をことごとく没収される。信長の没後堺に戻るが、秀吉に反抗して追われ、徳川家康のもとに走る。天正18年(1590)罪を許され、改めて秀吉の御伽衆となり、晩年は秀頼に仕えた。

53・54 久田宗全 正保4年(1647)～宝永4年(1707)

久田流茶道の第3代。2代宗利の子。母は千宗旦の娘。通称勘兵衛。雛屋を称し半床庵、得誉斎と号す。茶碗や花入れなどの手造りを得意とし、宗全籠花入は特に名高い。

55・56 久田宗也 天和元年(1681)～寛保4年(1744)

久田流茶道の第4代。3代宗全の子。半床庵、不及斎と号す。享保11年3月5日と同13年11月4日の2回にわたって、予楽院近衛家熙の召しに応じて参候し点茶したことが、「槐記」に見えている。

57 久田宗参 ～寛政12年(1800)

久田流茶道の第6代。5代宗悦の子。追遠居関斎と号す。

58・59 久田耕甫  
久田流茶道第7代。

60・61 小堀遠州 天正7年(1579)～正保4年(1647)  
遠州流茶道の祖。名は政一。宗甫、孤篷庵と号す。従五位下、遠江守。徳川家康、秀忠、家光に仕え、作事奉行としてその才を発揮。仙洞御所、大坂城本丸、二条城二丸、江戸城西丸などの普請を指揮する。また茶道を織部に学び、中興名物を選定し遠州七窯を開く。その好みは奇麗さびといわれる。

60・61 春屋宗園 享禄2年(1529)～慶長16年(1611)  
臨濟宗大徳寺派の僧。自号は一黙子。笑嶺宗訢に参じ、永禄12年(1569)大徳寺111世となった。のち堺の南宗寺、筑前崇福寺などを歴任、また大徳寺内の三玄院の開山となった。正親町天皇から朗源天真禅師、後陽成天皇から大宝円鑑国師の号を勅賜される。利休との交際も深く、宗旦を喰食として近侍させ、また織部、遠州の参禅をうけ、それぞれに号を与えている。

5 喜多見勝忠 永禄10年(1567)～寛永4年(1627)  
堺奉行。通称五郎左衛門。元和3年(1617)堺奉行に就任し、沢庵とともに夏の陣で回禄した南宗寺の復興に勤める。同9年秀忠来堺のおり、役宅で茶を点ず。在職中に没し、南宗寺に葬られる。

62 木津屋道久妻 元亀3年(1572)  
夫は堺・石屋町の商人。天正元年(1573)、堺・南宗寺の住持古溪宗陳が大徳寺117世に出世したおりの『古溪和尚入寺奉加帳』には、千利休、今井宗久ら堺の有力町衆とともに道久の名が記されている。本図の像主である妻については知るところはない。

63 戸嶋永秀 永禄～天正元年  
堺・宿屋町に住む茶人。『天王寺屋会記』の永禄10年(1567)～天正元年(1573)に戸嶋あるいは富嶋として登場する人物。本願寺坊官の富嶋に比定する説がある。

64 小西隆佐 永正17年(1520)?～文禄2年(1593)  
小西如清  
慶長2年(1597)、「泉州殿」と呼ばれた人物として、「和

泉守」を自称した小西隆佐・如清の父子が考えられる。隆佐は堺の薬種商。秀吉に仕え、天正14年(1586)、石田三成とともに堺奉行に就任した。隆佐の没後、文禄3年(1594)二男如清が奉行職を継ぐ。長男の行長とともに、キリシタンの一族として知られる。

65 茜屋宗佐妻  
夫は堺・宿屋町の豪商、茶人。信長の催した天正の茶会の一員であるため会合衆と目される。趙昌筆花の絵の右幅、茜屋茄子を所持。妻について知る所はないが、夫は茶会記などで天文18年(1549)から天正15年(1587)までの活躍が認められる。

66 天王寺屋宗閑 ～天正13年(1585)  
堺の豪商、茶人。姓は津田。宗達の弟、宗及の叔父にあたる。元亀元年(1570)玉仲宗秀が大徳寺112世に出世した折り、銭300貫文を寄せる。7回忌には宗及の乞いで春屋宗園が詩を寄せる。

66 紅屋宗陽 天正年間  
堺会合衆の指導者か。天正2年(1574)織田信長が堺の有力者10人を招き茶会を催したときの一員。同6年信長来堺の折りも、天王寺屋宗及、天王寺屋道叱の家とともに宗陽宅に寄る。虚堂墨跡、宗陽肩付を所有。同11年、闕所となり逐電する。

67 万崎屋  
堺の商人か。万崎は堺近郷の地名。

67・78 箔屋了宅 ～寛永8年(1631)  
堺・寺地町に住む富商、茶人。紹鷗の弟子。『数奇者名匠集』によれば名物太鼓茶入れを所有した。

73 天王寺屋宗凡 ～慶長17年(1612)  
堺の豪商、茶人。宗及の子、江月宗玩の兄。吉松、隼人の幼名で『天王寺屋会記』にしばしば登場する。秀吉の茶堂をつとめる。

74・75 長谷川藤広 永禄10年(1567)～元和3年(1617)  
堺奉行。通称左兵衛。妹は家康の侍妾。家康に仕え長崎奉行を勤めた。貿易の振興をはかる一方、有馬春信と謀って長崎港内のポルトガル船を沈め、また肥前有馬において過酷なキリシタン弾圧を行った。慶長19年(1614)

堺奉行に就任、夏の陣で焼けた堺の復興に努力した。

76 祐心 ～寛永2年(1625)

堺・源光寺11世。連歌をもって聞こえ、『古今相承伝授之次第』によれば、大坂の人淀屋箇庵について「古今伝授」いわゆる堺伝授を受けた。

77 住吉屋求派 寛永年間

堺大年寄。求派自身が寛永8年(1631)に著した『住吉屋由緒記』によれば、求派の父は住吉から堺に移り住み、酒屋を営んだ。

79 金田屋宗乙 寛永年間

堺総年寄。慶長12年(1607)堺・湯屋町に観音院を建立。常安寺とする。元和9年(1623)堺政所へ徳川秀忠・家光を出迎えた一員。茶会記に登場する誉田屋に比定する説がある。

105 飯尾宗祇 応永28年(1421)～文亀2年(1502)

連歌師。和歌を飛鳥井雅親、古典を一条兼良に、連歌を宗砌、心敬に学び、東常縁に古今伝授を受けた。公家、武家などにその道を伝え、特に連歌を地方に広めた功績は大きい。北野の会所の奉行を勤めた。

105 井上昌海 天保年間

俳諧、連歌師。名は貞則、別号秋香。天保9年(1838)版『俳家大系図』によれば大坂高麗橋島屋町に住む。俳諧は西山宗因、連歌は里村家の門人と伝える。

106 中江藤樹 慶長13年(1608)～慶安元年(1648)

儒学者。日本陽明学派の祖。名は原、字は惟命、号は顧軒など。はじめ伊予の大須藩に仕えたが、のち近江に帰郷して村民を教化した。王陽明の知行合一説に傾倒し、我が国陽明学の主唱者となる。また学徳高く世に近江聖人と称された。

107 片岡了二 宝永年間

宇治の茶師か。『京都御役所向大概覚書』に片岡道二という茶師の名がある。

109 喜多村理旦 享保年間

按摩。享保2年(1717)成立の『京都御役所向大概覚書』

によれば堺町押小路上ル町に住す。

110 山科宗安

医師。『町触』によれば、御幸町夷川に住み、享保6年(1721)、元文5年(1740)、寛保元年(1741)にそれぞれ女房ないし准後の出産に立ち会っている。

111 生駒元説 元禄7年(1694)～宝暦9年(1759)

医師。生駒元竹の養嗣子となり、医名京都に聞こえる。延享元年(1744)桜町天皇を拝診し、法印に叙せられる。宝暦5年宜春院の称を賜った。同年將軍家治の耳に達し、倉米百俵を与えられる。

112 御菌意斎(初代) ～元和2年(1616)

針師。摂津より京都に移り打鍼術を再興。正親町天皇、後陽成天皇に仕え、官鍼博士となった。秀忠が病の時江戸城に往診する。

116 生駒元珉 ～天明8年(1788)

医師。元説の子。名は光長、君石と号した。父の業を継ぎ、禁裏に仕え、法印に叙せられる。冷泉門に和歌を学んだ。

133・134 松尾芭蕉 正保元年(1644)～元禄7年(1694)

俳人。はじめ伊賀上野藩に仕えたが藩主良忠の早世後、致仕する。江戸に下り、延宝8年(1680)深川芭蕉庵に移り住む。諧謔を主とする俳諧にあきたらず、高い文学性をもつ蕉風を確立した。生涯を旅に過ごし、多くの紀行文を残し、江戸俳壇の主流となる。晩年になり「軽味」を提唱した。西国行脚の途次、大坂で客死する。

135 里村昌逸 宝暦12年(1762)～天保8年(1837)

連歌師。有隣亭と号す。連歌師の家系である里村北家九代目を継ぎ、天明2年(1782)家督を相続。寛政2年(1790)京都室町に300坪の地を拝領、天保中同朋格に進められ、同8年隠居するまで幕府に勤仕すること50余年に及ぶ。

137 小原慶雲 ～天保11年(1840)

絵師。端木または慶雲と号す。名は常之。倉敷に生まれ、父母と共に上洛、姓を小原と改める。小沢芦庵に歌を学び、岸駒に画を学び一家をなした。晩年倉敷に帰り

鶴を養ってこれを写し、妙を得た。堂上家に出入りし、法橋に叙せられる。

143 立入宗継 享禄元年(1528)～元和8年(1622)

従五位下、左京進、修理進。代々禁裏の御蔵職をつとめる。永禄7年(1564)信長の入京を正親町天皇に上申、自ら朝廷の使者として信長のもとに下る。また永禄10年にも岐阜の信長のもとに上洛を促す使者として出向いた。近世、立入家は官人として下御倉と交替で禁裏に進献。明治維新後は京都府貴族士族となり、宗継は尊皇の志が篤かったとして贈二位に遇せられる。

37 日野資枝 元文2年(1737)～享和元年(1801)

堂上歌人。烏丸光荣の子、日野資時の嗣となる。累進して権大納言従一位に至る。当時歌壇の権威として仰がれる。『詠歌一体備忘』『歌合目録』四巻などを著わし、家集は31巻をかぞえた。

44 天室宗竺 慶長10年(1605)～寛文3年(1667)

臨済宗大徳寺派の僧。一如子、雛道人、破笠子などと号す。玉室の法を嗣ぎ承応3年(1654)大徳寺190世となった。大覚円明禅師の号を勅賜される。

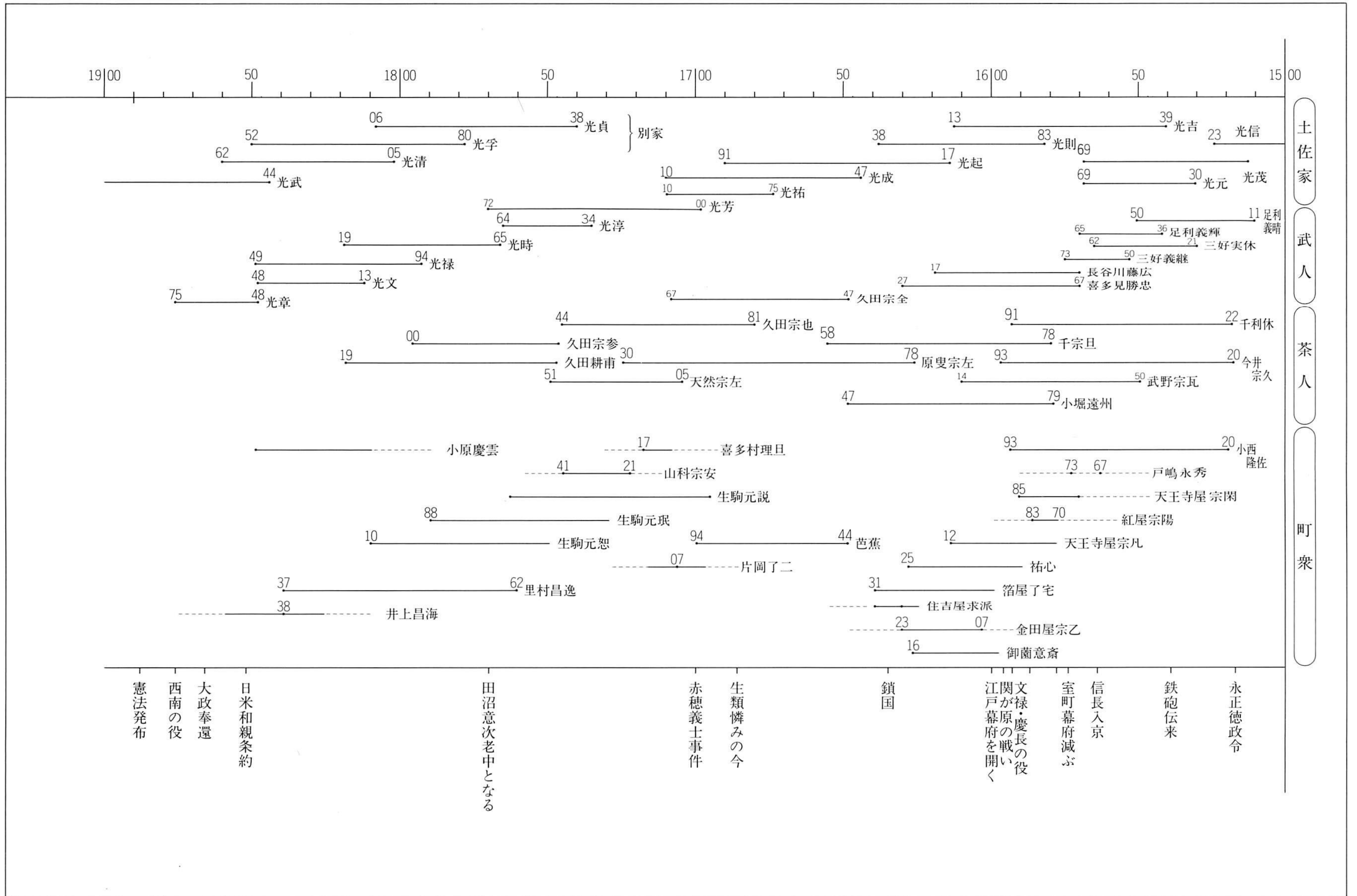
60 大森杖信 寛文9年(1669)～宝暦6年(1756)

茶人。名は重健。号を甘古斎、禎翁と称す。茶を小堀遠州の弟子であった父漸斎に学ぶ。『茶道葎集』の著作がある。

113・114 古筆了佐 天正10年(1582)～寛文2年(1662)

鑑定家。近江西川の人で古筆氏の祖。名は節世、正覚庵櫟材と号す。はじめ彌四郎と称したが薙髪して了佐という。もと平澤氏といったが、豊臣秀吉に仕え筆跡の鑑定に秀でたため、鑑定を業とするようになり姓を改めた。

# 〈生没年表〉



憲法発布  
 西南の役  
 大政奉還  
 日米和親条約  
 田沼意次老中となる  
 赤穂義士事件  
 生類憐みの令  
 鎖国  
 文禄・慶長の役  
 関が原の戦い  
 江戸幕府を開く  
 室町幕府滅ぶ  
 信長入京  
 鉄砲伝来  
 永正徳政令

(岩間香作成)